

# 眼人間・耳人間 横溝亮一

日本人は「眼人間」で、欧米人は「耳人間」だ、というようなことをいう。視覚に映ずるものは信用し、理解し、鑑賞し得るのに、聴覚に訴えるものに対しては、日本人はきわめて鈍感で、欧米人は耳においても確かだ、という程の意味である。音楽家が日本の音楽事情を慨嘆するような時、ふと洩れる言葉でもある。

ベルリンに長く住んでいる作曲家の石井真木が、たまに日本に帰ってくると、必ず「日本人は「眼人間」だ」といって怒る。音楽文化交流に熱心な石井は、いろいろな企画をたてて、文化庁に助成金の申請に出掛けたりするのだが、いつも美術とか演劇とか「眼にみえる芸術」に先を越されて、音楽はいつもあとまわしにされてしまうかららしい。そうしたことはかりでなく、羽田に着いた途端にどつと耳にとび込んでくる無秩序な騒音、雑音の渦に、神経が参ってしまいうからでもあるようだ。

私は石井ほどに神経質ではないが、それで

も外国旅行をするたびに「眼人間」としての日本人について考えさせられることが多い。

日本人旅行者の寝食を犠牲にしてまでも食欲な観光精神もその例だろうし、反対におそろしく声や音に無神経な例にもよくぶつかる。昨秋、ワルシャワのホテルで、大学の教授などを中心とした、かなり知的レベルの高い善の日本人団体と同宿し、この人たちが食堂といわず、ロビーといわず、声高にしゃべり、大きな音をたてるので、外人たちにかなり批判的な眼で見られていた。

しかし、考えてみれば、周囲のやかましい日本では、ある程度大きな声でしゃべらなければ用が足りない面があるし、お互いさまなこととして、それがちっとも目立つことにならない。物音にしても同様である。こうした社会環境の中で、いつか身についてしまった習慣が、外国に旅行した際にふと出たからといって、とがめだてするのは酷という気もする。

しかし、それは事情を知っている私のいう

ことであって、日頃、静かな環境の中で暮している欧米にとっては、騒々しく、品のない日本人どもだと見られても仕方がない。問題なのは、農協さんの団体であれ、大学の先生であれ、日本はやかましくて、欧米諸国はどこでも非常に静かだという違いにあまり気がついていないということであろう。だからこそ所かまわず大声でしゃべることにもなる。

そこで、社会的なモラルうんぬんもさることながら、日本人は生理学的に音に関して無神経、あるいは鈍感に出来上っているのではないか、といった疑念も湧いてくる。

西欧にあれだけ複雑に音をまぜあわせた音楽が出来上り、日本の場合はリズムもハーモニーもなく、ほとんど単音の連続する狭い音域の旋律しかない、というのも、要するに聴覚が鈍感だからだと考えるのは、あまりに飛躍し過ぎた暴論だろうか。もし、日本人の皮膚の色や体形の特徴と同じように、聴覚が鈍いのも基本的属性だとするならば、かくも喧騒に満ちた世の中で、平気な顔をして暮している日本人の不思議も理解することが出来るかもしれない。欧米人と日本人の聴覚を比較研究しているような学者がいたら、意見をきいてみたいものである。もっとも、聴覚といっても、音にはさまざまな種類があるし、人の反応は感受性、感性といった心的要素とも

結びつくから、そう簡単に測定、判定できるものでもあるまいが……。

ある友人とこんなことを話していたら、耳の方はともかくとして、日本人の声が大声にきこえるのは、言葉のせいかもしれないナ、とその友人はいった。日本語は非常に母音の多い言葉で、最初の子音をきき逃したら、意味がきき取れなかつたり、違った意味を持つ言葉になってしまうケースが多い。だから、日本人は「ええ？」「何？」ときき直すことが外人より多いのではないか、従って、ついに明瞭にしゃべるつもりで大声になるのである。その一つの証拠に、同じように母音の多いイタリア語、スペイン語などラテン系の言葉を使っている国民は、みな声が大い。というのがこの友人の論旨なのだが、どうやらこれはその場の思いよきのような気がする。でも、こうした雑駁な考えの中にある程度の真実が隠されているかもしれない。こんなことを真面目に研究している学者がいるだろうか。いるとすればこれも意見をきいてみたい。

親しくしている作曲家の武満徹は、作曲する時、音楽のイメージを視覚的な空間におきかえて展開し、それをオタマジャクシとして書く前に、図面として描いてみるのだと私に語ったことがある。

彼は音楽の展開を平安時代の絵巻物のように考へる。ある情景が巻物を繰り展げていくに従って、連続しながら移り変わってゆく。それは日本庭園とそこを散策する人間の関係でもある、という。樹々や庭石の位置はきまっても、人間の歩みに従ってその景観は変化する。自分の作曲する音楽はそのような形で主題が変化するのだ、と武満は語る。そして、彼は自分のイメージを展げ、構成するために白い大きな紙をのべて、ここに大きな庭石（第一主題）、その脇を通りすぎたこのあたりに亭々と聳える大木（第二主題）という風に、本当に絵を描くのである。それら主題群をつないでいくものとして、ある経路を辿って散策する人間を考へる。

昨年の秋の芸術祭大賞を受賞した「カトリオン」という管弦楽作品も、このようにして、イメージが固められて作曲された。この作品では、庭園を歩いている人間の役割を独奏ピアノが担っている。

私は武満にこうした話をきいた時、非常に興味深く思った。というのは、「耳人間」である筈の作曲家が、作曲という作業の中にある「眼人間」的な手法を採用しているからである。描写音楽を書く西欧の作曲家でも、情景を音のイメージに変える作業をするだけで、絵までは描きはしない。武満の場合、音のイ

メージがある立体的な空間を持った情景に転換し、それを大きくつばであるにせよ、紙に絵として描き、更にそれを本格的に音にするという経路を辿っているのである。これは武満個人のごく特異な例であるとしても、「眼人間」としての日本人の特性を、逆手にとつて、音楽に積極的に活用している例といえるかもしれない。

武満の作品が揃って芸術的に秀でているのは、何もこうした経路を辿る作曲をするのが理由ではなくて、彼の楽才がきわだって優れているからに外ならないが、音のイメージを視覚化して考へるようなところに「眼人間」としての日本人の属性をみる思いがする。

最近、世界的に「図形楽譜」による即興的作曲、演奏が一つの流行になっている。抽象画のような絵を描いて、これを楽譜と見立て、それから得たイメージを即興的に作曲・演奏するのである。もし、日本人が「眼人間」ならば、こうした作曲は得意とするところである、そのうち傑作が生まれるかもしれない。「眼人間」悲観するに限らぬということになる。もつとも社会的騒音にはもつと「耳人間」にならねば困るが……。

かくいふ私自身は……どうやら、どちらにも秀でたところはなさそう、我ながらがっかりする。